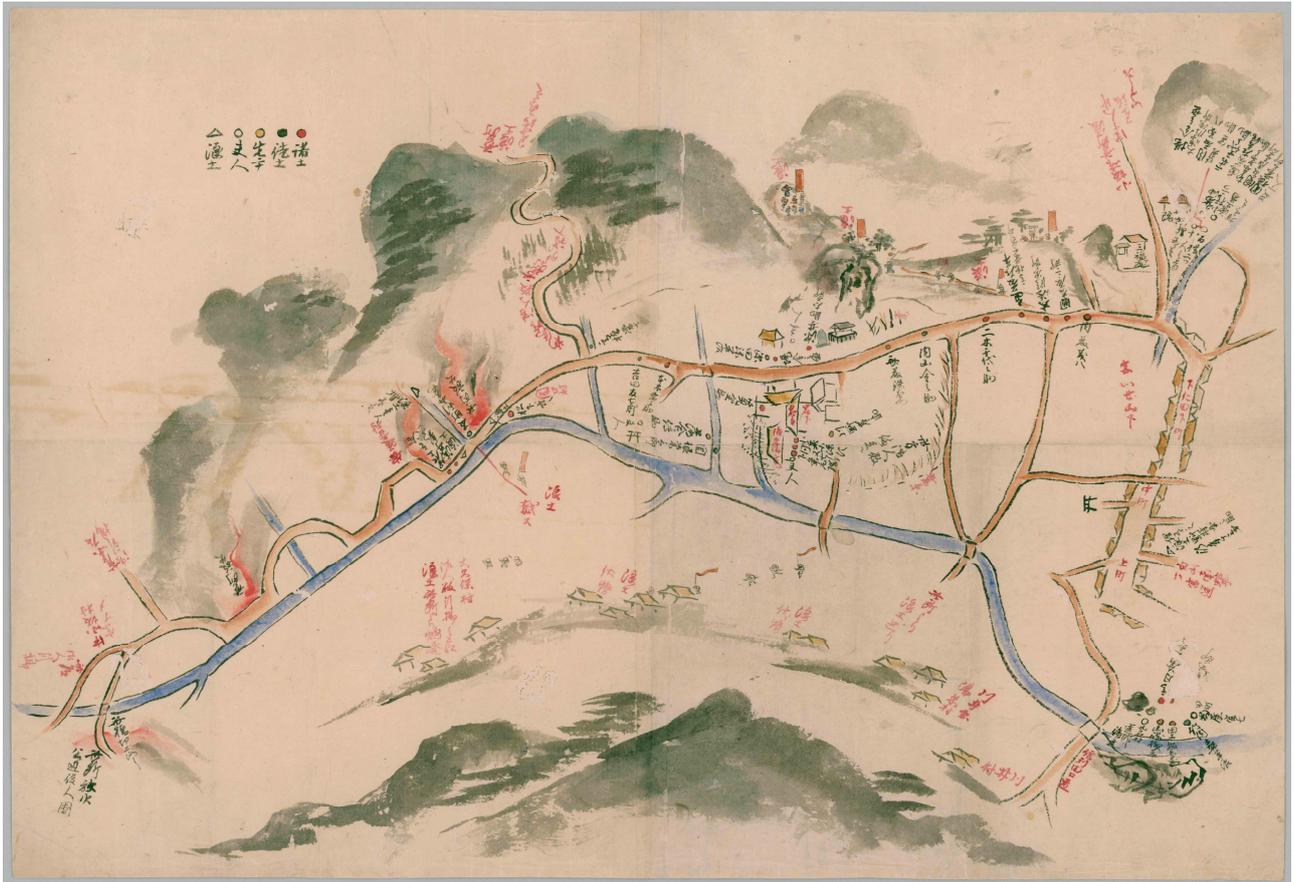


市史のひろば

第7号
(令和8年3月)



〔下仁田戦争関係地絵図〕

(高崎市立中央図書館蔵／画像は群馬県立図書館デジタルライブラリーより)

《 目 次 》

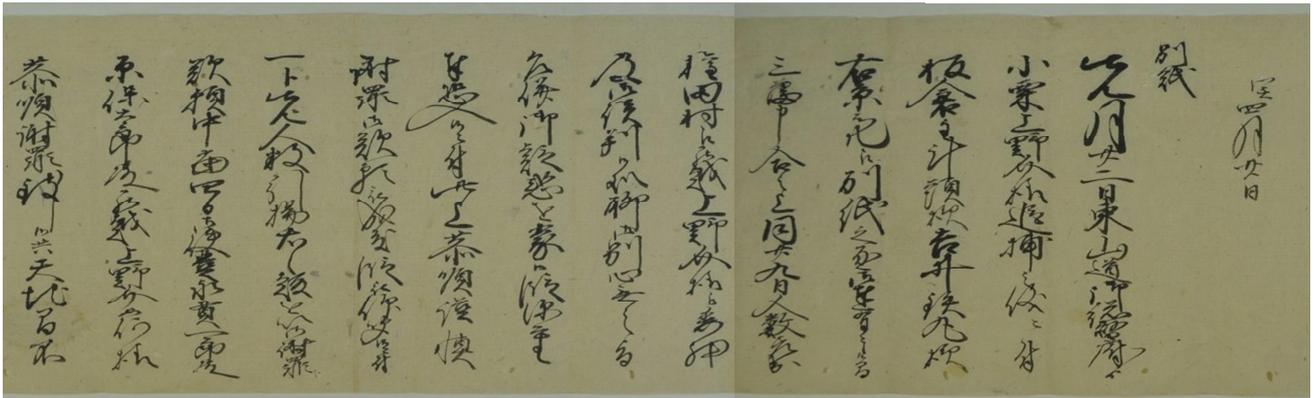
小栗上野介忠順と会津（丑木 幸男）	… 2
所蔵史料紹介 元治元年の天狗党関係筑波山周辺図（鈴木 一哉）	… 4
史料紹介 地元住民の見聞した下仁田戦争（鈴木 一哉）	… 6
執筆者紹介・表紙写真解説・奥付	… 8

小栗上野介忠順と会津

丑木 幸男

伝言ゲーム 小栗上野介^{ただまさ}忠順の生涯については、来年のNHK大河ドラマでどのように描かれるか楽しみだが、罪なくして強行されたという小栗処刑の情報がどのように伝えられたかを検討したい。

高崎市立中央図書館で数年間講師を勤めている古文書解読講座で、高崎藩士の子孫大沼啓一家文書の「小栗上野介様追捕一件御届済之義申上候書付」をテキストに昨年取り上げた。高崎藩の留守居役永井一左衛門が、小栗上野介追捕から処刑までの対応を藩へ慶応4年（1868）閏4月20日に報告した古文書である。一部を紹介する。



「小栗上野介様追捕一件御届済之義申上候書付」（一部）（大沼啓一家文書No.15）

「先月廿二日東山道御総督府を小栗上野介様追捕之儀ニ付、板倉主計頭様、吉井鉄丸様、右京亮江別紙之通御達有之候間三藩申合之上、同廿九日人数差出権田村江罷越、上野介様江委細及御談判候処、聊御別心無之旨、乍併御疑惑を蒙候段深重奉恐入候ニ付、此上恭順謹慎謝罪御嘆願被成度段被仰聞候ニ付、一ト先人数引揚、右之趣を以御謝罪嘆願中」とある。東山道総督府（官軍）が4月22日に高崎・安中・吉井三藩に対して、小栗上野介が自宅に砲台を据え城郭を構え、前將軍徳川慶喜が恭順しているのに反して不埒であると追捕を命じた。同月29日に三藩が軍隊を派遣し、小栗の住む権田村（旧倉渚村権田・現高崎市倉渚町権田）で翌閏4月1日に談判したところ、小栗は謀反の意図がなく、その証しとして所持する大砲を預けたので三藩は軍隊を引き揚げた。ところがこの文章の後半部には、同4日に総督府御使豊永貫一郎（土佐出身、陸援隊員、19歳、明治になり台湾警部）、原保太郎（丹波園部出身、岩倉具視側近、22歳、明治になり山口、福島県知事等歴任）がやってきて、小栗は「天地の間に容れべからざる大罪人」だから早々に追捕せよと命じ、原が指揮して小栗宅へ討ち入って小栗上野介らを召し捕り、同6日に「罪状明白なので天誅を加える」と、従者3人とともに隣村の三ノ倉村で「首切」をした。また、すでに逮捕され高崎藩が預かっていた子息の又一と従者4人は同7日に「ろうやのうしろ」で「首切」をした（『柴田日記』高崎市、2016）。「御父子首級ハ右保太郎殿被持帰、御家来首級ハ梟首被申渡候」と、父子の首級は原が持ち帰り総督府へ届け、従者は梟首（さらし首）にした。

江戸幕府の勘定奉行・陸軍奉行など重職を歴任した小栗処刑の情報は広く伝わったが、「伝言ゲーム」のように少しずつ歪曲されて流布した。虚実ないまぜの風説から「実」を発見し、「虚」の意味合いを取り出すことが歴史を学ぶ醍醐味といえよう。

徳川埋蔵金 「風聞記」(群馬県立文書館所蔵・磯田道史氏収集文書No.1)という史料には、小栗又一が上野守と改名し、権田村に新城を築いたので高崎・前橋・安中諸藩が討手となったとある。小栗又一が小栗上野介(上野守と間違い)に改名し、討手に前橋藩を入れており、不確かな風聞を記録したものである。この記録で注目されるのは小栗が「横濱御奉行」であったので、徴収した「蚕種生糸等」の運上(雑税)で肥やした私腹が7万両程あり、油酒樽等に詰めて国元に送ったという記述である。これがいわゆる徳川埋蔵金の風聞のもとになったのであろう。勘定奉行を文久2年(1862)以来4回も務めていたので豊富な資産を所持したと誤解されたのであろう。ちなみに万延二分金は1枚3グラムなので、7万両は14万枚、420キログラムになり、酒樽などで運搬したと妄想したのであろう。小栗は「アメリカへ罷越三年目ニ帰朝致し異人共ト心易ク相成」と日米修好通商条約批准に渡米し、外国人と親しかったと、攘夷派の反感を買っていたようだ。

小栗妻子の会津行と官軍抗戦派 「風聞記」には「小栗の奥方ハ入山通りニテ逃行、娘は草津峠通り落行」と小栗の妻子が二手に分かれて、小栗父子・主従を無理やり殺害した魔手から極秘に逃避したことが記録されている。行く先の記載はないが、身重の妻道子の組と、母くにと又一の許嫁^{よき}鉞子の組に分かれて、護衛のため権田村から20人ほどの歩兵(江戸でフランス陸軍の訓練を受けた村の若者)が付き従い、吾妻から秋山郷を越えて越後にたどり着いたところで、会津藩公用人秋月悌次郎(のちに熊本第五高等学校教師、同僚小泉八雲に敬愛された)に逢い、会津若松にかくまわれ、会津戦争のさなかの6月に道子は女兒を出産した(高橋敏氏『小栗上野介忠順と幕末維新』岩波書店、2013年)。

小栗は妻子の会津行きを事前に準備していたのであり、権田村に引退してからも会津との交流があったことが推測される。中島明氏は関東郡代木村飛騨守が関東取締強化のために小栗の土着を歓迎したこと、会津藩の「武備恭順」路線に小栗が深くかかわり、会津藩が品川砲台の大砲、武器を借用するのに小栗が関与したこと、白虎隊の一部が小栗の会津入りを準備したことを指摘した(中島明氏「松平輝聲と小栗忠順」『高崎市史研究』17、2003年)。

慶応4年1月15日に御役御免、2月28日江戸発足、3月1日権田村到着の間に、小栗は多くの来客と接した。そのなかに勘定奉行小栗上野介と同じ幕閣の歩兵奉行大鳥圭介、砲兵指図役並古屋佐久左衛門、庄内藩・佐倉藩・会津藩の各江戸家老のほか会津藩の秋月悌二郎ら多くの重役がいた。2月14日には大鳥圭介と会津藩公用人の神尾鉄之丞が来訪した。「小栗日記」(群馬県文化事業振興会『群馬県史料集、第7巻(小栗日記)』、1972年)には「逢申候」と簡潔に記録したが、小栗、幕府陸軍、会津藩の主戦派の交流が想定できよう。4月16日には江戸城引き渡しに不満の同志が会津へ脱走したことを伝える幕臣もあり、小栗の決起を訴えたのかもしれない。

同年3月8日に東山道総督府が中山道から高崎に入り、同10日に首脳陣が退去した岩鼻陣屋が崩壊し、2月以来上州を席卷していた世直し一揆がさらに激しくなり、3月2日と4日に権田村の小栗邸が一揆勢に襲われたが、4月には鎮静した。鳥羽伏見の戦い後、3月15日には江戸城総攻撃が予定されていたが西郷隆盛・勝海舟会談で回避された。しかし、旧幕府勢力の抵抗は続き、4月に市川、船橋、大多喜などの房総、下野では4、5月には大鳥圭介らを中心に宇都宮、今市などで戦い、東北では奥羽31藩が列藩同盟を結んで9月の会津城降伏まで抵抗し、江戸では5月15日に彰義隊の上野戦争があり、7月には河井継之助らが

越後長岡で戦い、8月には小栗とともに徹底抗戦を主張した榎本武揚が旧幕府所有の艦船を奪うなどの抵抗が続いていた。

榎田村移転後も小栗が軸になって下野・越後・会津等と連携して、官軍に抗戦する可能性はあったのである。小栗も「身斃るゝ迄は公事に執掌^{おうちょう}するこそ真の武士なれ」（福地源一郎氏『幕末政治家』東洋文庫、1989年）と、命のある限りは幕府維持に努めるのが真の武士と公言していた。妻子を会津に送り届けた榎田歩兵の会津戦争参戦もその推察を裏付けているようだ（小板橋良平氏「小栗夫人会津へ」『小栗上野介』みやま文庫、2004年）。

重職を歴任し罷免・復活を繰り返しながら幕府を支え続けた小栗上野介忠順の面目躍如といえる。しかし、処刑強行により官軍包囲網連携の構想は萌芽のうちに摘み取られたために、孤立した抗戦となり各個撃破されてしまったのである。

所蔵史料紹介 元治元年（1864）の天狗党関係筑波山周辺図

鈴木 一哉

筑波山・下妻の戦い 高崎藩士であった神保弘家に伝わる本号の表紙写真〔下仁田戦争関係地絵図〕は、元治元年（1864）年11月16日の高崎藩と天狗党との戦闘であるが、それ以前に高崎藩は常陸国（茨城県）で天狗党との戦闘を経験している。その戦場の一つが筑波山（つくば市）周辺である。[写真1]も神保家に伝わった絵図で、中央に階段や御堂が描かれ、堂の上に「男躰・女躰」と記されているのが筑波山である。以下では、近年刊行された堤克政氏『天狗党事件と高崎藩』（上毛新聞社）や『新編高崎市史』などを参照しながら下仁田戦争に至るまでの天狗党と高崎藩の動きを概観する。

元治元年3月下旬、水戸藩士藤田小四郎（父は藤田東湖）ら尊王攘夷派の中でも急進的な60余名が筑波山に

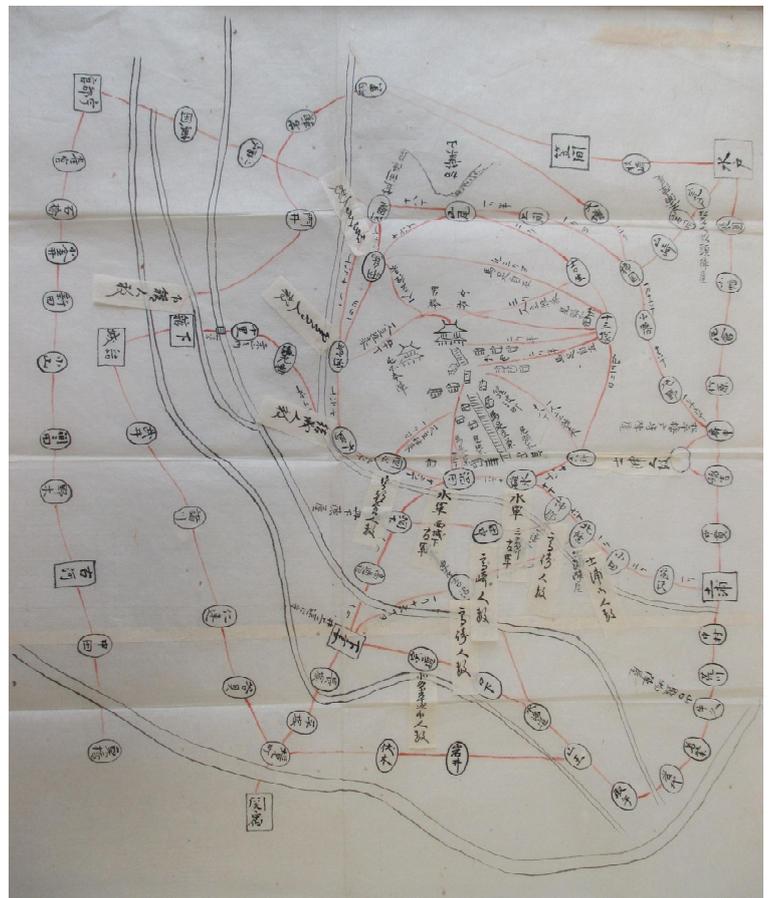


写真1 〔天狗党関係絵図〕（神保弘家文書No.36）より「筑波山周辺図」[40.5×39.5 cm]

挙兵した。彼らは「筑波勢」「水戸浪士」「天狗党」などと呼ばれた（以下、天狗党）。幕府や諸藩に安政6年（1859）から開港していた横浜を閉ざすように（横浜鎖港）、「攘夷」の即時実行を求めたのが挙兵理由である。この時点では朝廷・幕府ともに公式的には「攘夷」を否定しておらず（孝明天皇は修好通商条約を勅許していない）、問題はいつ・どのようように「攘夷」を実行するかについて、幕府・諸藩間でも、各藩内部でも一致はみられず、混乱が拡大していた。藩レベルでの最大の混乱は、徳川御三家の一つ水戸藩徳川家で起こ

っていた。

天狗党は4月上旬には、日光方面に向かい下野国（栃木県）の大平山（^{おおひら}栃木市）に本拠を移したが、6月初めには筑波山に再び戻った。この時、天狗党は約600～700人の規模になっていたという。人数の増加にともない軍資金が必要となり、常陸・下野・上野国の豪農や豪商に攘夷のために金子献納を強要する動きが活発化、北関東の治安は悪化していく。

幕府が高崎藩と笠間藩（茨城県笠間市）に「野州辺屯集之浮浪（天狗党）追討」を命じたのは、6月11日であった。6月17日には幕府は3000余人の幕府軍を編成し、これに水戸藩内の保守派で天狗党とは対立していた「^{しよせい}諸生党」と呼ばれた市川三左衛門の軍勢約700人も加わって江戸を出立する。高崎藩も高崎城から6月下旬には約1000名（若党鎗持等も含む）が出兵する。幕府軍と市川が率いる水戸藩兵は、7月6日には下妻（茨城県下妻市）に着陣する。追討を命じられた高崎藩など近隣諸藩兵も下妻など筑波山周辺に集まった。

[写真1]の絵図は、この時点前後の筑波山の天狗党を包囲する追討軍（幕府・諸藩）の配置を示したものと考えられる。絵図中央の御堂の左側の建物に「屯所本陣」とあるのが天狗党の本陣であろう。階段下には「見張所」と記され柵も描かれている。絵図の四隅に注目すれば、右上に「水戸」・左上に「宇都宮」・左下やや右に「関宿」（千葉県野田市）そのやや上方に「下妻」・右下やや上に「土浦」（茨城県土浦市）と記され、□で囲まれている地名は常陸国内及び周辺国の諸藩の城下で、○で囲まれているのは村名や宿場名である。この絵図には「高崎人数」「宇都宮人数」「水軍・官軍」などと記された貼紙が13枚貼られている。「高崎人数」とは高崎藩兵で、「宇都宮人数」とは宇都宮藩兵で、他に追討のため動員された諸藩名も貼紙に記されている。「水軍」とは水戸藩の市川勢で、「官軍」とは幕府兵であろう。この絵図からは、天狗党が引き起こした混乱の大きさがうかがえる。

7月7日、^{ほらげ}洞下村（つくば市）と^{たかさい}高道祖村（下妻市）との間（[写真1]では下妻の上に両村名）で小競り合いの戦闘が起き、天狗党側は筑波山に撤退した。勝利した追討軍は下妻に戻り、多くの寺院や民家に分宿した。7月9日早朝、天狗党は小貝川（下妻と高道祖村の間）を渡り下妻の追討軍を急襲した。幕府軍の目付永見貞之丞らは潰走し、この時、下妻の雲充寺に到着していた高崎藩先遣隊約130人もこの下妻での戦闘で敗走している。

那珂湊の戦い この戦いで敗れた追討軍側の水戸藩の市川勢は、水戸に向かい水戸城を占拠する。この状況に対し筑波山の天狗党も水戸に向かった。幕府は7月8日には若年寄田沼意尊を常野追討軍総括に任命し、追討軍は笠間城下へ向かう。9月12日には高崎藩も田沼の命を受け鉾田（茨城県ひたちなか市）に進出。9月24日に追討軍は水戸に向け笠間を出立、攻撃目標是那珂川河口の那珂湊（同県同市）方面に集結していた天狗党であった。

一方、水戸藩主徳川慶篤から水戸周辺における騒乱状態を鎮静化するように命じられた支藩の宍戸藩（笠間市）主松平頼徳は水戸城に入ろうとするが、市川勢はこれを拒否し、8月10日には両軍は戦闘状態となる。市川勢は、天狗党鎮圧のため笠間に布陣していた追討軍総括田沼意尊に援助を求めた。田沼はこれを承諾し市川勢は幕府の命令のもとで戦うことになる。頼徳勢（水戸藩執政榊原新左衛門勢700人余や尊王攘夷派ではあるが藤田らとは立場を違えていた武田^{こうんさい}耕雲斎らも随行）は、やむなく天狗党と共闘して戦うことになり、いわば「賊軍」となる。9月26日には頼徳は幕府側に投降するが、10月5日には切腹を命じられ、宍戸藩士20余名も斬首となる。武田耕雲斎らは天狗党に合流していく。

10月に入ると、追討軍は大挙して陸海から那珂湊を包囲し攻撃する。高崎藩兵約500人

もその中に参戦している。天狗党側も反撃し戦闘が続くが、榊原新左衛門勢などが追討軍に投降するなど兵力が不足していく。10月23日、追討軍は諸藩兵を総動員して那珂湊反射炉を目標に総攻撃を行う。この中に高崎藩の歩兵二隊も加わり奮戦し勝利に貢献している。こうして那珂湊の戦いは、追討軍側の勝利で終わる。

その後、堤氏の前掲書によれば、高崎藩兵は降伏した400人以上の天狗勢などの警衛を命じられ、11月5日には銚子（千葉県銚子市）に到り、高崎藩にて預かる者を3ヶ寺に收容するなどして11月13日にも銚子にいた。銚子周辺17ヶ村（総石高5000石）は高崎藩の飛び領であり、飯沼村には陣屋が置かれていた。つまり、高崎藩兵の主力は、下仁田戦争の直前の時点では高崎からは遠く離れた場所にいた。

天狗党西上 那珂湊の戦いに敗れた天狗党のうち約800人は那珂湊を脱出し、10月25日には常陸国久慈郡大子村（茨城県大子町）に入り、今後の方針を京都に上って禁裏守衛総督一橋慶喜（のち15代将軍）を頼り、朝廷へ尊王攘夷の大義を訴えることに決した。総大将には武田耕雲斎が選ばれた。一行は下野国梁田宿（栃木県足利市）を経て、11月11日には、上野国太田宿（太田市）に入った。そして、同月16日には下仁田戦争が勃発する。



史料紹介 地元住民の見聞した下仁田戦争－神戸金貴家文書から－

鈴木 一哉

神戸家「^{たなおろし}店卸帳」 元治元年（1864）11月16日の下仁田戦争を同時代の戦場近辺の人々はどのように受け止めていたのだろうか。その一例を、群馬県立文書館所蔵の神戸金貴家文書の「店卸帳」（神戸金貴家文書No.1468）から紹介したい。

下仁田戦争から2ヶ月余を経過した元治2年正月28日（4月に慶応元年と改元）、戦場となった甘楽郡下小坂村（甘楽郡下仁田町・下仁田村の隣村）から下仁田街道を信州方面（西）へ約2里（約8km）の本宿村（^{もとじゆく}同郡同町）で、上組名主を務めながら金融業などを営む在郷商人神戸金左衛門家の関係者4名は、同家の「店卸帳」の末尾に、「後年」のためとして、前年の元治元年の出来事について長文の「副書」を書き加えていた。

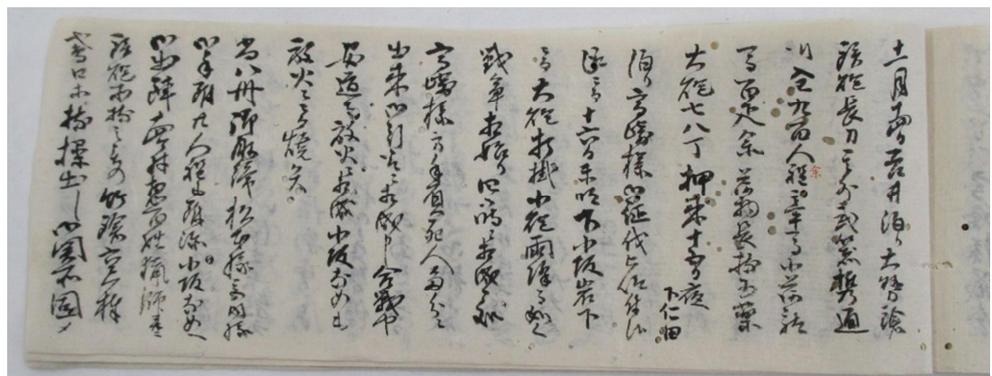
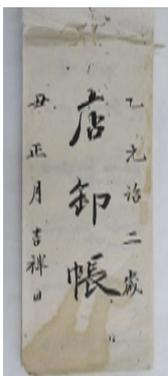


写真2 元治2年正月28日・店卸帳（群馬県立文書館所蔵神戸金貴家文書No.1468）

軍用金略奪 「副書」には、天狗党（本文中では「水戸浪人」「浪士」と記載）の動向が多く記されている。元治元年4月上旬には下野国の「大平山」へ「水戸浪人凡五六百人余も集屯」し、5月18日頃には「藤岡町（群馬県藤岡市）」へ「水戸様御家来」などと唱える8人程が「騎馬にて鎧を立て参り、宿村々相応之（有力な）百姓方」を呼び出し、「攘夷之義に付御国恩を相弁居候もの共より軍用金」を集めるためだと献金を命じたとある。彼らは藤岡から吉井（高崎市）・富岡（富岡市）・七日市（同）・一ノ宮（同）を経て5月22日

には下仁田に至り、呼び出された豪農・豪商たちに「金持参」させ、「凡千両余」が下仁田で奪い取られた様子であると記されている。天狗党別働隊による軍用金調達である。

神戸家にも下仁田から呼出状が届いたが応じていない。本宿村周辺14ヶ村で構成される組合村は幕府から「御関所（西牧関所^{さいもく}・本宿村と隣村藤井村所在）」を預っていたため、西牧関所を管轄する幕府の「八州御取締様（関東取締出役）」などから「御関所之義嚴重之御沙汰」があり、「惣百姓」が関所を固めていたが、この時は「浪士」は本宿村までは来なかった。6月6日には幕府役人が見廻りに来て、西牧関所の「通方」を嚴重にし、「浪士杯」は「無用捨差押、手余り候はば打殺候」ても苦しからずと命じられている。

天狗党下仁田へ 天狗党は、6月には「大平山から常州筑波山」へ戻って「大勢集屯」しているとある。「御公儀（幕府）様より御征伐諸家様方御出馬相成、争戦にて浪士方打死・生捕等にも相成候人数多分に御座候由」と10月下旬に那珂湊の戦いで天狗党が敗れたことを記し、その「残党武田伊賀守（耕雲齋）・田丸^{いな}稻^の右衛門^{えもん}・軍師山国兵部三人を始、凡千人、馬式百疋（匹）余」が「日光道中（日光例幣使街道）八木宿、木崎宿、太田宿辺より」西へと進み、そして（以下[写真2]の本文部分）「十一月十四日吉井泊り、大勢鎗・鉄炮・長刀其外武器携通行、全九百人余程、牽馬・小荷駄馬百疋（匹）余、荷物・長持・玉薬・大砲七八丁（挺）押来」った。「十五日夜下仁田泊り」である。天狗党は本陣を下仁田に置いた。

下仁田戦争 「高崎様（高崎藩）御征伐被仰付候趣にて、十六日未明、下小坂岩下にて大砲打掛、小砲雨降る如く戦争相始り、四ツ時（午前10時頃）に相成候処、高崎様方手負・死人多分に出来、御引取に相成申」すと、戦闘については簡単な記述である。そして「安導寺（下小坂村）放火に相成、小坂なめ（中小坂村）も放火にて焼失」と記している。

但し、戦闘は終わってはならず、「尚八州御取締松本様、宮内様」に「御手附廿人程も附添、小坂なめへ御出陣、十四ヶ村惣百姓・獵師并に鉄炮所持之もの、竹鎗・六尺棒・鳶口等持繰出し、御関所固めより小坂迄一同罷越」すよう命じられた。「一同出張高崎御引後暫く之間、鉄炮打掛、日之丸之御幡を建、御陣取」りしたが、「中々以浪士共数度戦争手馴居、剛勇もの故、殊に八州様御手勢僅にて、逆も拒きかたき、十六日夕刻御引、信州え御越に相成」った。西牧関所を管轄する組合村の武装した百姓・獵師を率いた関東御取締出役の戦闘も夕刻には敗北に終わる。この戦闘には本宿村民も参加していたのであろう。

本宿村宿泊 「当国（上野国）大名衆最寄々に御固め遠巻のみ、信州大名いつれも峠峰迄御出馬御固め御座候」であったが、「十六日夜、浪士大勢にて本宿泊り之由承り否哉、信州大名方早々引取申候由に御座候」と記されている。戦闘中は「近隣村々ハ勿論、引込候村方迄荷物・畳等形附、器物仕舞家内いづれ家々にても山林え逃去」った。16日の戦い後、天狗党は本宿村まで進み「浪士本陣に当家相成」り、とあるように神戸家に天狗党幹部ほか「百式三拾人程も泊ま」ることになった。「焚出・馬飼・大豆・麦・稗等巨細数不知、夜中浪士見廻裏表等嚴重に廻り、家内は男斗りにて不寝世話致し遣し、村内より白米并馬飼等取に被参」せるような状態で、「実に当惑仕候当近辺杯にて、開關已来大變之事」であったと記している。この部分は神戸金左衛門らの実体験である。

人馬混雑 天狗党は翌17日、内山峠を越えて信濃国（長野県）へ向かって去った。しかし、本宿村には19日・20日に幕府から指示があり、天狗党討伐のため「鉄炮所持之歩兵方幾千人となく」本宿村や近隣村に宿泊し、「大通行人馬継立等」で混乱する事態となっ

た。これら諸兵宿泊の費用は、「木賃穀代」だけは「少々御下けに相成り候分」もあったが「一切御下けに無之分」もあり「御下け分」もわずかで、神戸家は「大損費」となった。

店卸帳から 「店卸帳」とは商家の決算帳簿である。その末尾に記された「副書」は幕府や天狗党に見せるための文書ではなく、金左衛門らが神戸家の「後年」のために同家子孫など関係者に書き残したいわば私的覚書である。金左衛門らは天狗党別働隊の軍用金献納の呼出状を拒否していることから、「攘夷」の考えに積極的に心を寄せていたわけではないだろう。本宿村が西牧閔所を管轄している事情などから幕府寄りの考えを持っていたようである。しかし、下仁田戦争の経緯を記述する中で天狗党に対し、「中々以浪士共数度戦争手馴居、剛勇もの故」と、その戦闘能力は認めている。他方、討伐軍側の対応については、「当国（上野国）大名衆最寄に御固め遠巻のみ」と天狗党の西上を止めようとしたのは高崎藩兵（戦場にいたのは200名弱で戦死36名）のみであったこと、さらに信州大名が上野・信濃国境の峠まで出馬していたが、下仁田戦争の勝敗が決すると「信州大名方早々引取申候由」と記している。幕藩体制の軍事システムでは、1000人に近い規模の武装集団に対して有効に対抗できないらしいことは、庶民にも知られてしまったのである。

天狗党は、11月20日には信濃国和田峠で高島藩・松本藩兵を打ち破り、西上を続けるも、翌年1月15日には敦賀（福井県敦賀市）の手前で823名が降伏し350名余が斬罪となった。降伏した者の多くは百姓身分であったという。尊王攘夷を熱望する庶民も現れていた。



執筆者紹介

丑木 幸男 国文学研究資料館名誉教授

鈴木 一哉 高崎市立中央図書館・元高崎市史編さん近世部会調査員

表紙写真解説 【下仁田戦争関係地絵図】 神保弘家文書No.4〔年不詳／38.3×55.5cm〕

元治元年（1864）11月16日に甘楽郡下小坂村（甘楽郡下仁田町）の名主治兵衛宅（絵図中央やや右）周辺で、京都へ向かう水戸浪士（天狗党）と幕府より浪士追討命令をうけた高崎藩兵が戦闘となった「下仁田戦争」の関係地絵図である。この戦闘の際の両軍の兵の配置の様子や高崎藩の戦死者名が戦死場所に記されている。下仁田の町並（上・中・下）は絵図右端、左側が京都方面である。

この絵図は高崎藩大河内松平家の家臣であった神保家に伝存した文書群の一部であり、本絵図と類似した絵図は複数残り（『新編高崎市史』資料編5口絵写真など）、大正2年（1913）11月の「下仁田戦死者五十年祭典」にあたっては「上野国甘楽郡下仁田戦場討死場所絵図」として印刷刊行もされている。

なお、本史料は群馬県立図書館ホームページ（<https://www.library.pref.gunma.jp/>）内の「群馬県立図書館デジタルライブラリー」にて、高精細な画像を閲覧することができます。

市史のひろば 第7号

発行日 令和8年（2026）3月31日

編集・発行 高崎市立中央図書館

〒370-0829 高崎市高松町 5-28

TEL 027-322-7919／FAX 027-324-3423

E-mail toshokan@city.takasaki.gunma.jp

※「市史のひろば」は、高崎市立図書館公式ホームページに掲載されています（<https://lib.city.takasaki.gunma.jp/>）。